
心の破片 <200文字小説集>

遠野 桜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の破片 > 200文字小説集<

【コード】

N3079P

【作者名】

遠野 桜花

【あらすじ】

二百文字小説集です。

第一話 人形

お人形さん、お人形さん。

あなたは どうして そんなに 綺麗なの？

さらさらとした長い金髪。

とても深く澄んだ、碧い瞳。

フリルやレースで彩られた、深紅のワンピース。
真っ白な肌。

全部私にはなくて、お人形さんにはあつて。

私はね、お人形さんが大好きなんだ。

だから、答えて？

お人形さんは私のこと、好き？

私は、大好き。

だから、

そんな悲しい目で、私を見ないで。
笑って。

お願い、嬉しいなら笑って。

私は、あなたの笑顔を見たいな。

第二話 星空

俺は、一体何なのだろう。

ビルの屋上で、星空を見上げる度に、俺はそう思う。
キラキラと瞬く、星。

その光は、何千、何万もの一年を経て、仄かに夜を照らす。

俺に、そんな途方もないことができるのだろうか。

答えは、否。きっと、できないだろう。

何故、かって？

俺は、星空みたいに綺麗ではないからだ。

だが、俺は信じたい。

俺のしたことが、きっと何かに繋がっていると。

何かに、繋がっていると。

それだけを頼りにして、俺は進む。

第三話 何故

あなたは、どうしてここにいますか？

何かを変えたいから？

何かを知りたいから？

何かを考えたいから？

えっ、どうして君はここに居るのかって？

退屈かも知れません。あなたは、構いませんか？

ありがとう、頷いてくれて。だけど、話すことはあまりないの。あなたと違って、ただ、ここにいただけ。

何か鋭い痛みを感じたら、ここにいて。本当にどうなってるのか、分かんなくて。

だから、あなたに一つお願いがあるの。

何故かを、教えて？

第四話 血肉（前書き）

ガールズラブ注意

第四話 血肉

私は、惟を壊してしまいたいぐらいに大好き。惟を、目茶苦茶にしてしまいたい。

だから、惟。

私のことを、絶対に離さないで。

大丈夫だよ、美羽。

私も、美羽のこと大好きだから。惟がどんなに嫌がっても、私は惟を離したりしない。いっそのこと、美羽の血肉になってしまいたい。あまりに傲慢過ぎるかも知れない。だけど、私は美羽の全てになりたいの。

ありがとう、惟。そう言ってくれて。それだけで私と惟はもう、一つの存在だから。

第五話 茨姫

自らの身体すら分からない、純粹な闇。聞こえるのは、衣擦れの微かな音だけ。

そんな環境に私は安らぎを感じていた。私は、眠っていたい。このまま、息が絶えるまで眠ってしまいたい。

何故かって？

そうすれば、何も見なくていいから。何も聞かなくていいから。何も考えなくていいから。
だから、早く眠ってしまおう。

何の音もしない街。

深々と、雪の降り積もる新月の夜。

深夜を告げる鐘の音と共に、一人の少女が永久の眠りについた。

第六話 誓約

嗚呼、愛しい貴女。何故、怯えるの。誰も外から貴女を傷つけはしない。中から、貴女を侵すだけ。

ただ、甘い、甘い快感に包まれて墮ちていく。

グラスに貴女と私の、誓いのワインを注ぎましょう。独逸の嚴冬に置かれた葡萄から創られた、金色のワイン。この金色の輝きへ、ただ純粹に、死だけを見詰める毒薬が、燦然と華を添える。

綺麗でしょう？

だから一緒に、背徳と快樂と、耽美の花園へ、どこまでも、墮ちていってしましましょう。

第七話 陥落（前書き）

第六話の別視点バージョンです。

第七話 陥落

きつと、私は震えていたのだろう。

「綺麗でしよう?」

綺麗な金色に輝く、毒の仕込まれたワイン。彼女は美しい黒髪を靡かせて私に近付き、グラスを掲げる。

そして、私に囁く。

「私と一緒に、どこまでも、堕ちていってしまいませんか?」

彼女は、グラスの最初の一口をゆっくりと飲み干し、二口目を口に含むと、その唇を私の唇に押し付ける。抵抗する唇と舌を蹴散らし、ワインを流し込む。

ふっ、と意識が抜けて、

私は、堕ちていった。

第八話 飛翔

日光を反射して、煌めく川面。
岸辺に座り、歓談に耽る家族。

それを俯瞰していた私には、そんな光景は絵空事でしかなかった。
もう、私には何も無い。

私は太陽を睨みあげた。その強烈な光は私の網膜を灼き、その強烈な熱は私の身体を蝕んでいく。

それはまるで、世界に刃向かおうとした人間への罰のように私を灼く。

その熱さに、私は悪寒を覚えた。ただ、解放されようとするため、私は宙を飛ぼうとして、

窓ガラスを破って飛び出した。

第九話 降雪

深々と、雪が降る。私の頬を僅かに擦って雪が溶けていく。澄み渡った空から、まるで永遠に降り続く桜の花びらのように、雪が舞う。

日本神話で、神様の住まいは夜桜の咲き乱れるところだと言つ。それならば、この世界は神の住居に最も似つかわしい。

だけど、神様には悪いかも知れないが、今、この世界には私一人だけ。

残酷なまでに美しい月の光が、降り積もる雪が、私を狂わせ、戻れなくさせていく。

そう、

私は、この世界の支配者。

第十話 定理

普遍的なもの、それはこの世界にあるのでしょうか。

例えば、泣きたくなるぐらい辛いとき、あなたはどうしますか？

心の命じるままに、泣き散らしますか？

それとも、涙を流すまいと血が滲むほど歯を食いしばって耐えますか？

どうするかはあなた次第。だけどその中に、正しいものがあるとは私は思いません。この世界に、完全に正しいものなんて有り得ないのですから。

最も、この世界で数少ない定理は、あまり気づかれていませんが。

第十一話 親友

壊れたように桜が咲いていた。首から紐を垂らして壊れた人形のよ
うに彼女の身体は宙に浮いていた。彼女はその青ざめた唇を開く。

「私のこと、覚えてる？」

「覚えてるよ。どうして、死んじゃったの？」

彼女は薄く笑う。

「それは、言えないの。だけど……お願い、私のことずっと覚えて
て」

私は彼女の手をぎゅっと握った。

「絶対に、覚えてる」

最後に彼女は、笑ってくれた。

「ありがとう」

それだけを言うと、彼女は宙に消えていった。

第十二話 天音（前書き）

微百合……ですかねww

第十二話 天音

少し汗ばみ、はだけた浴衣。

あられもない姿を月光に曝し、怯える目は黒水晶が嵌め込まれたように澄んでいた。

僅かに揺れる睫毛、小さく震える綺麗な唇、見事に洗練された細い面立ち。

発展途上の華奢で控えめな肢体、シーツを背景に艶やかに伸びる黒髪、暑いのか桜色を帯びた白くて滑らかな肌。

この美しく未熟な墮天使の全てが、私の中にある。

彼女の愛らしく乱れた息遣いを聞きながら、私は囁く。

「天音の華を、咲かせてあげるね」

第十二話 天音（後書き）

個人的には水でぼやかしたような感じの背景が好きなので、「小説」として読むには物足りない方も多いかと。

そこはデフォルトなので堪忍して頂けたら嬉しいです（そんな作品ばかりです、笑）。

第十三話 晩夏（前書き）

二百文字小説企画ES参加作品。処暑なのでさっぱりと。

第十三話 晩夏

「今年の夏も、もう終わりかあ……」
李沙はそう言って、ぺたんと縁側に座り込む。視線の先は細く欠けた三日月。

「だからって一緒の時間が減るわけでもない。一つ屋根の下なんだから」

「そうだね」

俺は李沙が持ってきてくれた麦茶のコップに口をつけようとする。それを彼女の細い腕が制した。

「乾杯」

「あ、ああ。乾杯」

ガラスのぶつかる澄んだ音。月の光を映しながら、李沙の喉に葡萄色の液体が流れ込む。

てか、未成年が酒飲むな。

第十四話 雪穂

真っ白に染め上げられた街を、一人の少女が駆ける。後ろに束ねた黒髪は虚空に靡き、寒さからかいつも白い頬はピンクになっていた。白い息を吐いて、それは俺に走り寄って抱き着く。

大きく見開いた黒い瞳、整った細い鼻梁。雪に負けないほどの清らかさを湛えた面立ちに、どうしても視線が引き込まれてしまう。

「遅れちゃってごめんなさい、先輩」

「遅せえんだよ、雪穂」

照れ隠しに、俺はその冷えた華奢な身体を思い切り抱きしめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3079p/>

心の破片 <200文字小説集>

2011年12月10日21時01分発行